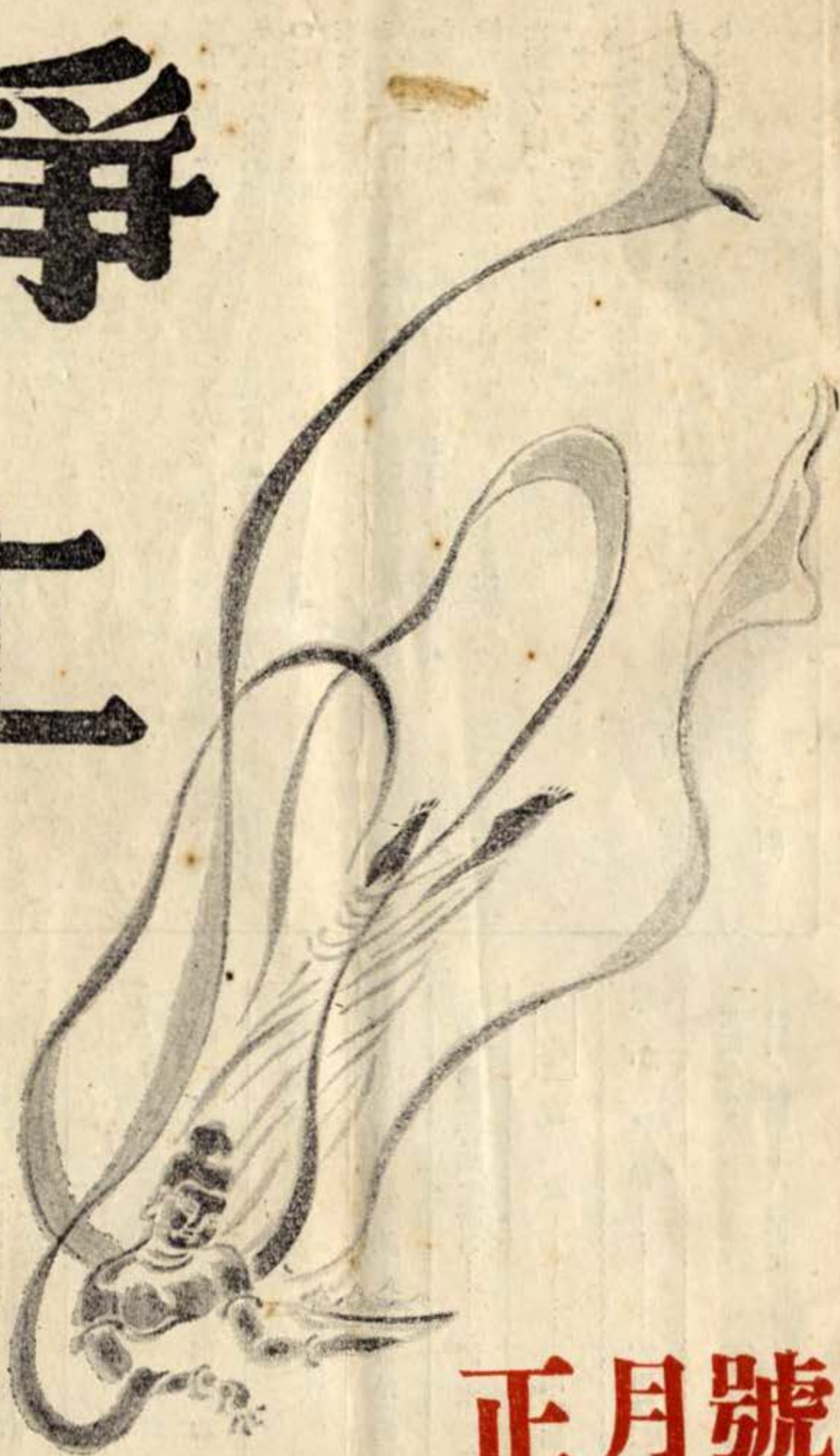


昭和十年五月廿三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和二十四年四月二十八日運輸省特別換承認雜誌第三五二號
昭和二十七年十二月廿五日印刷
昭和二十八年一月一日發行

第十九卷

正月號

淨土



正月號

12/6

すべて、新らしくなるのは善い事です。新年になつて、また一つ年齢がふえたと嘆くのは、人生をうしろ向きに行くもの。そんならば、生れてこの方、嘆き通していねばなりません。

新玉の年立ちかへる初めに戻つて、また新らしく生れ變つてゆく。それが人生の不思議な喜びです。すつぱりと今までの一切をふるい捨て、ちようと亂雲の上に新雪を浴びた富士の頂が輝き出るやうに、また新らしく人生をはじめ。若人は若人のまゝに、老いたるは老ひたるまゝに、もう一度「ふり出し」にもどつて人生をはじめ。だから楽しいのです。

永い人生の間には、色々と思はぬ成行きで、さまざまなのが自分にのしかゝり、壓しつぶされるやうな重荷が重なつて、次第に身動きも出来なくなつてゆく。世間がそうであるやうに、心の中もそうです。そしてその重荷のうちに知らぬ間に、老ひてしまふ。それを年に一度、すつかりふるひ落して、改めて考へなをし、拾ふものは拾ひ、捨てるものは捨て、ゆく。たとひ古くともすつかりすぎ仕立て直した新衣です。また新しく軽々と生れ變つてゆく。それが新年でしよう。

すべてを捨てる事によつて新らしくなる。

視野もひろがる。新鮮な自由も出てくる。

まづ、すつかりふるい捨てゝをいてから、ひとつ新しく若水を浴びましょう。

(正 順)

浄土 正月號 目次

慈光を仰ぎて……………中村孝也(4)

—詩と信仰の世界—

正月特集・アンケート……………(20)

年末年始のエチケット……………早見君子(20)

初春 狂言……………梅津和夫(19)

談 對 佛教と近代精神 {中村 元 (12)
佐藤賢順

名利めぐり 知 恩 院……………新保義道(16)

訪問 佛教音楽を語る……………清水 修(25)

創作 吉 水……………東山末知夫(29)

暮 から 春……………吉田絃二郎(1)

芝園だより

表紙・挿畫……………松濤達文

暮から春

吉田 絃二郎



冬枯れの武蔵野の雑木林のかなたに、雪につゝまれた秩父が見られるやうになつた。

遠い雪の山はさびしいものだが、人のこゝろを落ちつかせる。平常は人生の上ツ面だけをながめてゐるわたくしたちのこゝろを、おのづと、底深く沈潜させる。

雪をいたゞいた遠山は黙々としてうづくまつてゐる。何か考へてゐるかのやうに。

たしかにはろはろの雪をいたゞいた山は悠久について、寂然たる生命の運命について思恆しつゝあるやうに思はれる。

冬枯れの野を歩めば、ちぎれ雲も思惟し、道ばたの石も雑木林のひたきも黙々として思惟しつゝあるやうに思はれる。歩いてゐるわたくし自身の靴音までが寂然とて思惟しつゝあるやうに思はれる。

わたくしは武蔵野の散歩から家にかへつて來た。
そこにも默然として思惟しゝあるものを見出す。

わびすけ椿の花、寒椿の花、つくばひの傍の眞つ紅な萬年青の實も、梢の青鸞も寂然として思惟しつゝある。

人間も禽獸も草木も悉皆成佛の機縁がありとすれば、冬枯れ時のこの靜觀の境にあるのではないだらうか。

わたくしは裏の畑から霜枯れた小菊の枝をあつめて來た。大晦日の黄昏に門口で焚くためである。

どんなわけで大晦日の黄昏れに菊を焚くのか、理由は知らないが、わたくしの田舎の家では、いつの年も大晦日の夕暮れには菊を焚いた。そして菊を焚くのは母とわたくしの役目であつた。

ふだんは忘れがちである母のやさしいおもかげが、菊を焚く夕べだけは、今更のごとく、はつきりと浮かんで來る。

大晦日の夕暮れはわたくしにとつて悉皆成佛の尊い一刹那である。

除夜こそ凡夫にとつてありがたい夜である。

昔は夜おそくまで提灯を點して、貸金を集めに歩くいはゆる晦日の鬼が駆け廻つたものであり、なかには聲をあらゝげて罵りわめくやうな光景もあり、近松の作にも晦日の金に困つたゆゑの悲劇を描いたものがあり、鷹ヶ峯の光悦も大晦日の夜四十年來の親しい交りを斷つたといふ談もある。

る。

光悦の話といふのはかうである。光悦が大晦日の夜、夜更けてから、かねて親しくしてゐた商人の家の前を通りかゝると、多勢の人々が門前にたゝすんでゐた。光悦がその一人にわけをたづねると「御當家では毎年お支拂ひの金は大晦日の十二時が過ぎてからでない、と、下されぬのでございます」といつた。これを聞いた光悦は

「さてさて商人といふものはあさましいものかな。大晦日の夜は誰れでも一刻も早くわが家へかへつて、妻子をよろこばせたいのが人情であるのに、わづかの金利をかせぐために、この寒空の夜更けに、多勢の人々を門前に待たせるとは……」といひ、ふつつりと四十年の交りを斷つてしまつた。

除夜の鐘を聴くと、思ひ出さるゝ話である。

除夜の鐘が鳴り止んだと思ふ間もなく春が來る。たゞ一夜のちがひであるが、春を迎へたといふばかりでわたくしたちのこゝろは改まる。

雪につままれた遠山は昨日のまゝである。落葉しつくした雑木山も、庭の寒椿も、萬年青の紅い實も昨日のまゝである。

しかし正月を迎へたのだと思ふばかりで遠山にも、雑木林にも光りがたゞよひ、寒椿にも新たないのちが動く。

これはわたくしたちの心の置き方が一夜にして改められたからである。けさの春を迎へた刹那わたくしたちは童心に立ちかへつたからである。

破魔弓や獨樂や紙鳶に胸ををどらした童心時代がよみがへつて來たからである。

童たちは手をさしのばして月をとらえようとする。童たちのこゝろは月の世界からまだ遠くはなれてはゐないからだ。童たちのこゝろこそいつも淨土に住んでゐる。

春が來て、童心にかへつた時わたくしたちの眼に見るもの、こゝろに感ずるものすべてが淨土の光りにつままれるであらう。

今朝は春だ！ 茶の下を低くくゞつて笹鳴く鶯にも、庭

の片隅に消え残つた淡雪にも生きてあることのありがたさをしみじみと感じる。

絶句 杜甫

遲日江山麗 遲き日に江山は麗しく
春風花草香 春の風に花草は香んばし
泥融飛燕子 泥は融けて燕子の飛び
沙暖睡鶯鶯 沙は暖かにして鶯鶯の睡る

日ざしのおそい春の日、山も川も、色彩に富んでうるわしく
空氣は、花のにおい、草のにおいにみちている。つばくろは、
巢を作ろうとして、泥をふくんでとび、川岸の沙はまには、め
すおすつがいのおしどりが日ざしをあびて、ねむっている。

杜甫はこの詩で、調和を無心にたのしんでいる。いゝかえれば、おのれも自然の一物である以上、そうした完全な調和の中にはいり得る可能性を、もつことを信じ、その可能性の保證として、眼前のうつくしい江山と、幸福そうな小動物とに、見入っている。

吉川幸次郎―新唐詩選



慈光を仰ぎて

— 詩と信仰の世界 —

文學博士 中村 孝也

「浄土」五月號に故藤田寛雅君の追悼文を寄せてから、いつの間にか半年以上が経過した。春から夏を経て、秋風がそろそろ身に沁みわたる。寂しい。

寛雅君の逝去は、何べん繰返して考えても、あきらめ切れない痛恨を伴う。そればかりでなく、寛雅君をめぐる多くの人々が、前後して世を去つていくことも、また大きな悲しみである。殊にあの文章を書いた時には御存命であつた長泉院の大島泰信老師が、それが活字になつた時には、既に遷化して居られたのは、悲しみでもあり、駭きでもあつた。「死期はついでを待たず、死は前よりも來らず、かねてうしろに迫れり。人みな死あることを知りて、待つことしかも急ならざるに、覺えずして來る。沖の干瀉はるかなれど、磯よりも潮の満つるが如し」と書いた兼好法師の言葉を引用したものを、心なきことのように、辛く切なく

思う。

いづくんぞ知らん、「死期はついでを待たず」。「死はうしろに迫れり」。五月四日、鴻巣勝顔寺に赴いて寛雅君の一周忌の法會に参列した日から僅かに五日の後、五月九日突然發病して東大病院において前後三回の手術を受け、死生の境を彷徨しながら、不思議に一命をとりとめ、五箇月振にようやく退院歸宅して見ると、庭上晩春の風物は面影をととめず、秋雨がしとくと降つて、蟲の聲が細い。

六月十一日、二度目の大手術の後、連日連夜の激痛と高熱とに喘ぎ悩んだとき、私は何といふこともなく、廿三日・廿四日・廿五日の三日間に、自分の運命が決するのだと思つた。廿三日は過ぎた。病苦は衰えない。廿四日を耐えた。苦惱は増すばかりだ。廿五日の夕刻に至つて、精も根も疲れ切つた私は、すべての希望がみじめに踏みにじられたこ

とを知つた。

私はそれまでは生きたいと思つていた。然るにこの時心機が一轉した。私は自ら再起の希望を抛棄してしまつた。

紙片に鉛筆で次のように走り書きしてある。

あの日この日一日二日と數へつゝ過せし甲斐もなき生命かな

廿五日今日敗北と書きとめて再起の希望を自ら抛つ私はつぶやいた。

「醫術は限界に達した。もう駄目だ」。

醫學にも限界はありその先は霞のにほふ美しき國か

とも記してある。

夜は更けてゆく。苦惱は加わるばかりだ。ぐつたり寢臺の上に横たわる肉體に生氣がない。灰色にぼかされている鈍い電燈のあたりに、朦朧として大きな黒い手の影が動く。眼はどんよりと天井の一角をみつめる。もやもやと立ちこめている霧が、ぐる／＼と渦巻くと見る途端に、ぽかりと觀音様のお姿が浮んだ。

「お迎へにいらしつて下すつたのだ」。

私は覺えず歡喜の聲を擧げた。涙がとめどもなく流れる。合掌して見上げると、大きな香の包が、ほたり／＼と身のまわりに落ちる。馥郁たる薫りがあたりに漂ふ。

「どこかで拜んだことのある觀音様のようだ」。

じつと見上げまいらせると、そうだ、まさしく中宮寺の

如意輪觀世音菩薩でいらせられる。

「現世の生命は、いよく／＼終るのだ。人が死んでゆくに、は、どのような思いをいだくものかを、せめては書き残しておきたいものだ」。

それは懸命の努力であつた。私は最後の思いを書き残したいばかりに、枕もとを搜して、辛うじて鉛筆と便箋とを取り上げた。そのとき書いた覺束ないメモが、今、幾枚かのこつてゐる。記してある。

中宮寺の如意輪觀世音菩薩きこしめせわがゆく道に香を焚きてたびたまへ

氣分がたいへん落着いて来る。見ると私はたゞ獨りで、席い野原を歩いているではないか。同伴者はいないのであらうか。

われと共に行くは誰れぞや仇し野を飄々としてひとりし歩む

奥さんもない。息子も娘も愛孫たちもない。友人もない。お弟子さんたちもない。廣々した野原をたゞひとり、飄々として歩いているのである。氣分はらく／＼としてゐる。

すると小脇に抱へていた美しい包が、ぽたりと草原に落ちた。

「あれは學問の包だな」

と思つた。さすがに愛惜の情が動く。この包には私が一生

かゝつて蓄へた學問知識が納めてあるのだ。ところがそればかりでなく、引きつゞいて小さな包が、またほた／＼と落ちてゆく。位階勳等の包だ。地位資産の包だ。名譽信望の包だ。傳統閱歷の包だ。何もかも次々に落ちつくしたとき、一段と身輕になつた。

眞實の我れをこそ見たれ珍しくあなたこなたより眺め見まわす

六十七年の生涯を通じて、外部から幾重にも自分を裝飾していたところのすべてのものがごとく脱落してゆくのを、物珍しく眺めていた私は、そこにはじめて「眞實の我れ」を發見して、あちらから、こちらから、いろ／＼の角度から自分を檢討している。それは喜ばしき貴重な發見であつた。

あたりが馥郁として薫じわたる。光明がほんのりと天地に遍滿する。

ほのかなる香のかをりに誘はれていづこまでゆくさすらひの子ぞ

氣分はのび／＼としている。何となく楽しい。しかしどうも不思議だ。

「なぜ阿彌陀様がお見えなさらないのだろう」。

私は自分を反省した。そうだ、もし私が平生敬虔なる念佛の行者であつたならば、この時にこそ阿彌陀如來の來迎を拜み得たことであらう。近々と淨土の莊嚴に近づきなが

ら、私はついにその門をすら見ることがなくして終つたのである。私は結局さすらひの子であるほかの何ものでもないのであらうか。

疲れて昏々として眠りに落ちたらしい。メモは途絶えてゐる。記憶もない。氣のついたときには、廿六日の朝日があか／＼と窓の外を照らしていた。附添の看護婦野平よね子さんは、固く口を結んで、枕もとに立つて、じつと見おろしながら、手首の脈をおさえている。眼は充血している。昨夜は一睡もしなかつたのであらう。

野平さんに感謝する。このようなよい人を附添わして下さつた佛恩に感謝する。野平さんは誠意の人だ。賢い人だ。心の美しい人だ。長い病床生活を通じて、私の氣に逆らつたことがたゞの一度もない。いつも私の心を洞察して、先廻りして手配をしてくれるので、驚かされることゝたび／＼あつた。物に動ぜず、熟練した手で、咄嗟に適當な處置をとつてくれるのが常であつた。重態のつゞいた十數日の間、一遍も入浴しなかつた。三十分以上病床から離れることがなかつた。多くを語らず、眼はいつも私の身邊に注がれていた。うつら／＼して眼が覺めたとき、きつと口を結んで看護していてくれるのを見ると、心強く、頼もしく、その手に縋るのであつた。

「観音様がお遣し下すつたお方だ」
と思つた。至れり、盡せり、瘁い所に手のとゞくように世

話をしてもらつて、時としては、

「観音様の御化身ではないか」

とも思つた。それは高熱の時の幻想かもしれないが、私は絶対の信頼を以て、いつも素直にその言うことに従つた。その素直な心が、どれほど私を救つてくれたか測り知ることが出来ない。そして側にいてくれるなと思ふと安心して眠れた。

しかししまいには、さすがに疲れ切つて、椅子に腰をおろしたまゝ、寢台に顔を伏せてうたゝねすることがあつた。

「倒れてはたいへんだ」。

私は愕然として、もう一人の附添さんを頼んで、暫く休息してもらつた。

あの場合、あのような決死の着護がなかつたならば、私は危機を凌ぎ得られなかつたかも知れない。いつまでも恩にきる。永久に忘れまい。五年前に亡くなつた最愛の末の娘は、端麗にして清純、羨ましいほど豊かな天分を具へた子であつたが、野平さんは、その子よりもたつた一つ年上だ。私は亡き娘への思慕を胸にいだきながら、だまつて手足を伸ばして、世話を受けた。ほの／＼した氣持がいつも身邊にたゞよう。

(7) 諸先生方が、慘澹たる苦心を重ねて、老軀を再生の道に導いて下すつた海嶽の洪恩を深く感銘しているのはもとよりで

あるが、今はこれに觸れない。

◇

幻視だ、幻聴だ、幻覺だ、幻想だ、すべては病苦の所産だと言つてしまえば、それ切りのことであらうけれど、私には、どうしてもそうだと言つて振り切ることが出来ない。少くとも、そのような幻覺をもつたということが、今までに無かつた貴重な體驗である。もしこの幻覺の夢のなかで死んだとするならば、私の死顔は、安らかな笑みを含んでいたことであらう。

然るに私は、不思議にも一命を全うして生きかえつたのであつた。生きかえつたけれど、それは今まで生きていた世界に歸つたのではなかつた。私は今まで歩いて來たのと同じ道を歩く氣持をもたない。

「私は生きかえつても、もとの世界には戻らない。私はこれから新しい道を歩くのだ」と、言葉に出して人に語りもした。それは易々と轉向し得る道のように思えた。實際その頃は暫くの間、現實の生活に興味が無くなり、世の中は索然として蠟を燭むように味氣なく感ぜられたのであつた。

五里霧中に美しい花園を求めるとような氣分はありながら新しい道が眼前に展開して來るのでもないのに、身心共に力弱く、三伏の炎暑を、うつら／＼、病院で過して、八月

の末日、一應退院、百十三日振りに歸宅した。

「よく生きて歸れたものだ。」

清らかに装うてある書齋の風情に、家人の温かな心を酌みながら、寢臺で休息していると、壁間のカレンダーが、五月のまゝになつてゐるのに氣がつく。私は惘然として卓上の花瓶に目をうつした。新しい道はこゝでも見出されない。

「なまじいに學問知識に累せられるのかも知れない。しかし私はいつぞや學問の包を落してしまつて、眞實の我れを見つめたのではなかつたか」。

學問が脱落し去つた後の私は、一文不知の人間に還元し得た筈である。明鏡止水、花の影を映し、雲の姿を浮べる用意が整つてゐる筈である。謙虛な心を以て、いかなる指教をも受け容れられる筈である。然るに解答が出て來ない。問々の間に再び入院して、三度目の手術を受けることになつた。秋の色はようやく濃やかになつてゆく。不思議な廻り合せで、もとの病室、もとの寢臺に落着いたが、野平さんはいない。私の心は壁にぶつかつたように動きが取れなくなつた。

これもまた不思議な廻り合せであるが、月こそ違え同じ廿五日、九月廿五日の夜半、眼が覺めると、底の知れぬ寂しさがひし／＼と身に迫つて來る。起き上つて床上に端座し、瞑目して思いを凝らしていると、何やらあたりが馥郁

として薰じわたる。便箋を取り上げたら次のようなものが書けた。

「あの時から、新しい道を歩いている筈なのに、いつの間に、またもとの道に戻りかけてゐるのか。私の行く道は、利害得喪の渦巻く世間道ではなくして、温かな慈愛の國に通じる美しい道である筈だ。そこには佛・菩薩が遍満して居られる」。

そのとき、忽然として心が開けて來た。佛・菩薩はいづこにおわしますか。

「佛・菩薩は人の裡に在り」。

古の碩徳は、とうの昔から知つていたことであらう。今の凡夫は、今にしてはじめて思い當つた。私は人生を見直さなければならぬ。

私は今まで、生活の現實の面から觀察する場合に、人類は哺乳動物の最も發達した段階に腰をおろしてゐる生物であると思惟してゐた。これは生物學の教えることであり、今でも誤りだとは思わぬ。人生の矛盾、撞着、混亂、不合理、凡そ暗黒面の諸現象と呼ばれるものが、この事實に基因すること、また肯定し得られる。そしてこれを肯定しながら、人生を憎むことが出來なかつた。それはそのまゝで宜いと思つてゐた。

私はまた人類は、自然物の一つだと思惟してゐた。人類は禽獸蟲魚、山川草木と同列に並んで、大自然を構成する

要素の一つなのである。その人類は自己の狹隘なる經驗に基き、専ら自己の生活を規制しようとして、法律をつくり道德律をつくり、宗教律をつくつてゐるけれど、それ等は皆、時間より見れば一時的であり、空間より見れば部分的であり、念々流轉して變化定まりなく、絶對の信賴を託することが出来ない。然るに人類の意志によつてつくられたのではないところの自然律は、永遠性を有し、普遍性を有し、山川草木、禽獸蟲魚、及び人類を包容してその生活を規制し、毫末も除外するところが無い。その大自然は健全である。易經の初めに、「天行健」とあるのは、この大事實を道破したものに外ならず、人類は最終的に自然律の規制の下に立つものであつて、法律も、道德も、宗教も、自然に接近すればする程、永遠普遍なる健全性を増進するのである。こゝにおいて「自然に歸れ」という鐵則が生ずる。私は今でもこの鐵則を信奉する。而してこの鐵則の指針に従い得るものとして、不自然に歪められたる人生を愛惜することを禁ずることが出来ない。

私は人生を愛惜する。さりながら、このような思惟の裡から、端的に神性・佛性を抽出し、演繹することは困難だ。神性・佛性に憧れながら、これを把握することに悩んだ私は、

果てもなく澄みわたりたる大空の

下に小さき我が姿かな

と歌ひながら、人間に失望して、

私の周邊には人間がいない

在るものは山川草木ばかりだ

天は高く、地は廣い

私は孤獨感に徹する

そして山川草木を愛する

とも記した。私は周邊の人間を、禽獸蟲魚だと思つて、これを相手にしないか、或はまた山川草木だと思つて、これを親愛するかによつて、孤高的な清節を全くしようとしたのであつた。それは浮世を壓うて山林に逃避した古の聖（ひじり）と相通する心境である。そのような恩惟をもつた過去數年間について今更毫しも後悔をしていない。自分を憐れんでもいない。その恩惟自身をも否定しない。その時はそれで宜かつたのである。

然るに今年、五箇月に亘る病院生活において、多くの人々から心配され、慰められ、勵まされ、力づけられ、その親切をしみじみと身に受けた上、觀世音菩薩の慈愛を夢みて、人間の愛情の裡に、佛・菩薩の大愛を感得することが出来た。それは死に直面して恵まれた大きな幸福であつた。私の心境は徐ろに展開しはじめた。

而して九月廿五日の夜半、忽然として一路の開通を覺えたとき、私は佛・菩薩の大愛が、山川草木を通して顯現し禽獸蟲魚を通して發動していることを知つた。それは學問ではない。實證に基く科學ではない。それは詩であり、信

仰である。そのまゝで宜しい。この詩と信仰との世界こそは、今より後、自分の安住すべき世界だ。

私は幼少の時から、觀世音菩薩を信仰している。物心のついた頃、村寺の和尚から教えられたのは、妙法蓮華經觀世音菩薩普門品第二十五のうち、「世尊妙相具、我今重問彼」と書き出してある長い偈であつた。それよりこのかた念彼觀音力の信心は肝に銘じている。その觀世音菩薩は、すべての佛菩薩を代表するかのやうに、常に私の眞正面に立つていらせられる。私はそれで満足している。

私は今まで觀世音菩薩を愛し、慕ひ、親しみ、仕えて來た。しかし報いを求めなかつた。山川草木、禽獸蟲魚をも愛し、親しんで來た。しかしやはり報いを求めなかつた。然るに人に對しては、これに親しんでは親しまれんことを求め、これを愛しては愛せられんことを求める場合が少くなかつた。それは何故であらうか。歎きも惱みもこの場合に生ずる。

花を愛する

身近に見て楽しむ

しかし報いを求めない

鳥を愛する

身近に聽いて楽しむ

しかし報いを求めない

人を愛する

見て聽くだけでなく

なぜに報いを求めるのか

求めて得られれば

楽しみそして悦ぶ

得られなければ歎きまた恨む

人を愛しても

花鳥を愛するのと同じく

報いを求めないのが宜しい

道理は判つている

けれども求めて得られないで

思ひ悩む自分が悲しい

「身近な人を觀世音菩薩だと思つたらどうだろうか」。

三十三身の示現によつて臨ませたまふ觀世音菩薩の、複雜にして豊富なる性格内容の片鱗をすら具有せざるとき人はこの世に存在しない。その片鱗を通して、すべての人の生命は、觀世音菩薩と結びついているのだから、すべての人はことごとく有縁の衆生である。「觀音・勢至もろともに、慈光、世界を照耀し、有縁を度してしばらくも、休息あることなかりけり」と、その宏大無邊の大慈光によつて度せられたる衆生は、それごとく小さな觀音的性格を分有する筈だ。それは最も高い段階に腰をおろしている哺乳動物たるだけのものではない。それは一個の自然物たるにとゞまらない。人皆はそれごとく觀世音菩薩の小さな分身である筈だ。然らば報いを求めないで、ひたすらこれに仕えまつることが出来る筈だ。

「先ず身近な人を觀世音菩薩の化身として拜もう」。

それは語るべき人ではなく、花をさゝげ、香を焚いて奉仕すべき菩薩でいらせられる。そればかりではない。それを推し及ぼせば、身遠なる人々も皆、觀世音菩薩の化身でいらせられる。然らばすべての人々に、花をさゝげよう。その御前に香を焚こう。それこそ實に私が新たに踏み出す道の第一歩だ。

人は皆

觀音の化身にませば香を焚き花をさゝげて仕えまつら

む

詩の國、信仰の世界は、美しい樂土だ。

觀世音菩薩の大愛は、人ばかりでなく、禽獸蟲魚を通して發動し、山川草木を通して顯現する。禽獸蟲魚、山川草木が誤つて人に危害を及ぼすとき、一たび觀音力の慈光に接すれば、彼等は翻然として戈を收め、首を垂れ、悔い改めて、小羊のやうに従順になる。「若し惡獸圍繞し、利き牙爪怖るべきあるも、彼の觀音力を念すれば、無邊方に疾く走りさらむ」。「蛇及び蝮蠍、氣毒煙火のごとく燃ゆるも、彼の觀音力を念すれば、聲を尋ねて自ら回り去らむ」。「或は巨海に漂流し、龍魚諸鬼の難にあうも、彼の觀音力を念すれば、波浪も没する能はず」。「雲雷電を鼓撃し電を降らし大雨を凌ぐも、彼の觀音力を念すれば、時に應じて消散するを得ん」。これは畢竟彼等の裡に、また觀音的慈愛が潜在するからであらう。

然らば我らは獨り人に對してばかりでなく、禽獸蟲魚、山川草木に對しても、また觀世音菩薩の片影を仰いで、溫かな親愛を寄すべきであらう。

これは學術の世界の事ではない。學術の世界には、學術としての無限の興味がある。これは詩と信仰との國土の事である。こゝにはまた酌めども盡きせぬ滋味が滾々として溢れ流れている。美しいかな幻想、楽しいかな白夢、愛と光明は、かくして有生無生、全宇宙に遍滿する。

◇

死生の境に出入して、この一念に徹到し得たのは、實に無上の幸福である。悠々たるかな天地、藹々たるかな人生、翼くは一切萬象の上に、永しえに生々の悦びあれ。

私は老軀にしてこれほどの大患を凌いで來ながら、この後尙、長く地上に呼吸しているだろうとは思つていない。「死期はついでを待たず。死は前よりも來らず。かねてうしろに迫り。人みな死あることを知りて、待つことしかも急ならざるに、覺えずして來る」。いずれは再び觀世音菩薩のお迎えを受けて、阿彌陀如來の御膝もとに往生する時が來ることであらう。

鳥の將に死なんとするや、その鳴くこと哀し。人の將に死なんとするや、その言うこと善し。私は今、肅條たる秋風の裡に立ちて、懺悔と告白とを、この世に遺しておく。

對談

佛教と近代精神

東京大學教授

中村 元

大正大學教授

佐藤 賢順

編輯子

今日はアメリカより御歸朝早々の中村先生を煩はしまして、アメリカに於ける佛教の様子とか、特に先生が課題とされている東洋人の思惟と佛教との問題等につきまして、佐藤先生と忌憚ないところを御話し頂きたいと存じます。

アメリカに見る佛教

佐藤 過日佛教徒會議席上、たま／＼その談

長をされて居た伊藤述史氏と隣席したのですが、その折、氏に何故に佛教信仰に入られたかを聞きました所、政治的な理由からであると言はれました。それは本當の平和を樹立する爲には、西洋思想では駄目にて、佛教の因縁所生の法、即ち緣起の思想でなければ出来ないと言ふことでした。

最近、第三勢力とでも云ひますか、東洋本來の考へ方が強く表面に出て來た様に思はれますが、歸趣に迷つてゐる日本人、特に青年

達の爲にも、東洋的な考へ方と西洋的な考へ方を比較して、充分佛教といふものを考へなほしてゐる必要があると思ふのですが。

中村 先生の言はれる通りです。アメリカ人等にしましても、アメリカは一番よい、そして強い國であると言ふ事は誇りとし、又信じて居る様ですが、然し少しでも物事を考へる人は、果して現在のアメリカの状態でよいかと言ふ事を反省しています。例へば原子爆彈と言ふ様なものも、これの使い方が問題であると考へて居りますし、單に物質的な強さと言ふ點のみでなく、更に精神的なものを求めようとしているようです。

クリスチャンの非戰論者等は、日本に對してアメリカが宣戰布告した事が已に悪い。アメリカが日本に戰はざるを得ない様にさせたのだとまで考へてゐる程で、戰前、宣戰に反對した一婦人議員の講演内容等この様にして（英文パンフレットを示す）全國にくばつてゐる程です。

又或る人は、クリスト教の歴史は戰いの歴史であり、こうした教に依つては平和は得られぬのだとして、東洋の思想に依り所を求め

ようとしています。その一つはラーマ・クリシナ・ミッシェン(Rama Krishna Mission)と言ふ印度教にて、こゝでは釋迦もクスリトも祭るのですが、盛んに行はれ、白人許りが集つて來て居ます。

もう一つは佛教にて、主に禪的なものに心をよせている人が多い様ですが、特に之と言ふ明瞭なものとしてよなしに、新しい東洋の教に入りたいと言ふ氣持が強い様です。

佐藤 主にどんな所に心を引かれ、又受け入れようとしているのですか。

中村 まあ、何と言つても、平和の教であると言ふ點でせうね。西洋のは國争的なものが多いと考へ、平和を實現する教は東洋の教、特に佛教であると考へてゐるようです。或る學生等は、印度の思想は、綜合的、直觀的に物を見たり考へたりする點が、西洋の分析ばかりするものより、實踐原理として非常によいと言つていました。

又或る人類學者の教授夫人等は、社會の平和の爲には、佛教は非常に合理的でよいと言つて居ました。然し本人は社會生活ではクリスチャンとして通していましたが、……

佐藤 仲々よい所を見ているのですね。ところで、平和主義だと言ふ彼等の佛教の理解は一體どんな點ですか。

中村 まあ、簡単に言ひますと、自分と異なつた意見のものもその存在を認めると言ふ様な平和主義なのでせう。對立を闘争にまでしない點ですね。然し或る生れながらの盲目な判事等は、自分の盲目は「業」の爲であると説いた佛教の教へで始めて安住したと言つていましたが、こうした理解の仕方もしている向もあります。

アメリカの佛教教會

佐藤 アメリカでは佛教の教會が多くある様ですが、日本人がそのリーダーですか。

中村 日系人が居る所では、日本系統の佛教教會がありますが、日系人でも、向ふに永住してしまふ積りの人はクリスチャンになりますね。所が將來日本に歸らうとする人は、佛教徒として居續ける様で、仲々此處の所は微妙なものです。(笑聲)

佐藤 そんなのですすかね。宗派はどこが多い様ですか。

中村 眞宗のお西さんが、斷然多いですね。淨土宗とか曹洞宗も相當ある様ですが。然し教會等は日本の寺院等とは大分行事も違ひまして、仲々派手にやりますね。例へばダンスパーティーをやつたり、或はミス佛青を選ぶとかです。そして、二世でも英語の方が上手なので、悔教師なども英語の出来る人を望んでいますね。

佐藤 行事等どうですか。

中村 花祭り等仲々盛大にやる様です。何でも賑やかなのが好きで、涅槃會等はやらぬようです。

佐藤 中國人等も大分居る様ですが、彼等も佛教徒ですから、やはり佛教を信仰しているのでせうね。

中村 いや、それは一寸違います。主に中國人等は、宣教師の世話で来る様で、殆んどクリスチャンです。チャイナ・タウン等でもクリスト教の方が盛んです。然し最近佛教寺院も出來つゝあり、二十四時間奉仕勞働で建設しています。

佐藤 晝夜で仕事をするわけですか。

中村 そうです。功德になるのだ等と揭示し

ていました。白人等も奉仕に参加している様です。所が中國の坊さんが居ないので、或は折角寺が出来ても、日本の悔教師にでも佛事を頼まねばならぬ始末らしいです。とんだ所で中日親善といふわけですね。(笑聲)

佐藤 二世の人は、やはりクリスト教の方がよいのでせうね。

中村 いや、必ずしもそうとは言へません。然し日本佛教そのまゝでも駄目にして、何と言ひますか、もつと合理的な佛教と言ふものを望んでいるのでせう。二世の開教師でも出来れば更によいでせうね。

佐藤 クエーカーが相當勢力を得ている様ですが、どんなものですか。仲々活躍している様ですね。

中村 そうですね。アメリカ許りでなく、ロンドンやバリーや印度等にもあつて活躍はしていますね。思想的には多分に佛教に近いもので、内心に光を求めると言ふ様な事を言っています。

佐藤 モーリス(Charles Morris)でしたか
マイトレイアー・ウェイ(彌勒道)とかを大いに説いていた様ですが。

中村 彼に言はせると、アメリカ人の様に、單にインヂョイメント許りでは駄目で、佛教の様なリタツチメントなものがなければならぬと言つています。今度の著書等にも彌勒の圖を掲げるとか言ふ事ですが、自分の説く事等には、大いに未來性があると信じていますね。

佐藤 原始佛教的なものと、淨土教的なもの、どちらが受け入れられやすいでせう。

中村 今の所、禪が最も受け入れられていますね。これは然し鈴木大拙先生等が大いに禪を説いて居られる事に依るものとも言へませう。

佐藤 念佛を唱へたり、如來を信じたりする事等はどんなものですか。

中村 そうですね。アメリカでは餘りない様ですね。アラン、ウアット(Alan W. Watts)等が一寸説いてはいましたが、元來彼もクリスト教信者ですからね。

東洋人の老へ方

佐藤 先生等日頃東洋人の考へ方について考へられている様ですが如何ですか。簡単に言

ふとどんな特色のあるものだと思へられていますか。

中村 そうですね。よくそう言つた事を聞かれますがね。仲々こゝの所は難しいので、例へば各民族の共通性と言ふものはつかめないのではないでせうか。従つて、東洋人と言つても極めて廣いのでして、もつとちやめて佛教國に限るとすれば、佛教を信する民族には何かそこに共通したものがあると言へませうね。

佐藤 私も東洋人と言ふ事を、それ程廣く考へようとするのではなくて、先生の言はれる様な意味で東洋人がある範圍に限定するとき何か其處に共通した考へ方があると思ふのです。例へば、今度出たガンジー聖典の翻譯等見ましても、釋尊の言つている事と餘り變らない。寛容、梵行(淨行)、無抵抗とか言ふ様な事がですね。そうした點から考へますと、何か東洋的な考へ方の共通性と言ふものがあると思はれます。

中村 確かにその通りです。そうした點からしますと、印度教等も佛教もジャイナ教も違つたものでないと印度の人は考へています

従つてデリー等に行つてみましても、ジャイナ寺院も佛教の寺院も同じ様に建てられていますね。たゞしクリスト教とマホメット教等はつきり別のものとしている様です。東洋的な考へ方と違ふと言ふのでせうね。例へば非常に闘争的であると言ふ様な點です。しかし、ヒンズー教が言つて居る四民平等と言ふ如きものは、元來佛教のものでして、彼等にはなかつた筈のものですから、佛教のを取り入れたと見られませうね。

佐藤 確かにそうかも知れませんが、寧ろ多分にそうなる政治的なものがあると言へますね。

新興宗教と佛教

佐藤 色々話が飛ぶ様ですが新興宗教に対する佛教の將來とか、或は佛教の取るべき態度と言ひますか、この點どんなに考へられますか。この間も後樂園で世界佛教徒會議歡迎国民大会を開いた折、何分にも広いスタンドをどの様にうめるかに大変心配した。所が妙智会とかいふ宗教が、三万人程も引率してくれたと言ふ有様にて、まことに恐るべき勢力を

持つていゝと言へます。この會員の情熱等大したものでした。

中村 物凄いなものですね。

佐藤 それにその信仰の態度等も感激的なもので、当日演奏した楽団の指揮者等、信者達が音楽を聞きながら感激して泣いてゐる姿を見て驚いていた次第です。

中村 新興宗教については私は餘りその内容を知りませんから詳しい事を申し上げられませんが、これには佛教の内部にあるものと外部にあるものとの二つの新興宗教があります。そして、如何に絶對的な教と言つても、やはり時代的な、又は社会的な制約と言ふものはまぬがれぬものでせうから、新しい時代なり社会なりに實踐的に生きる教へは、人間の力ではどうにもしようがないのではないでせうか。

新興宗教が若し日常生活に害を及ぼすものであるなら、やはり各人が努力して、生活を改善して、知識程度を高め、批判的な目を開かせる事により、そうした新興宗教を近づけぬ様にすると言ふ事が必要でせう。然し、そうした批判的なものをもつてしても、尙残つ

て行く新興の宗教と言ふものがあるなら、それは已に残るに値する宗教であると言へるのではないでせうか。従つてこれに對しては佛教は實踐の方向を明瞭にして、生活の混亂とか、空隙をみたす様に指導すべきであると言へませう。過去の教がそうであつたから、今もこう説くのだと言ふのでは駄目です。

佐藤 私もそう考へています。佛教は非常に合理的な教ですが、その合理性のみではやはり駄目であつて、人間本來の要求と言ひますか、欲望と言ひますか、そうした面を處理してやる實踐的指導が必要と思つています。そうした點を適切にやる所に新興宗教の盛んな理由があります。この點佛教も大いに反省して、世俗的なものも、之を單に世俗的として捨てず、その中に方便行と言ひますか、そうした點の指導を充分考へるべきでせう。

編輯者 色々有難うございました。まだ多くの問題もありませうが、時間も参りましたので、この邊で打ち切り、又の機會を持ちたいと存じます。



知 恩 院

—名判めぐり—

新 保 義 道

衛門の魂の籠つたものである。

金右衛門の霊やすかれと念じつゝ、三門を左に仰いで女人坂を登つてゆく。登りつめると廣々とした境内がひろがり、正面に御影堂左に阿彌陀堂、右手に輪藏、納骨堂と棟をならべている。

ふとんきて寝たる姿や東山

の句で有名な東山三十六峰の一つ、華頂峰の麓、京洛の街を一望の下に見渡せる景勝の地に、堂々百餘棟をならべて聳え立つ大伽藍こそ法然上人の鎮まります祖廟知恩院である

この聖域は今から七百數十年の昔僧俗貴賤男女を問わず、法を求め道を求めて来る者に對し、上人は靜かに念佛法門をお説き遊ばされ、又御入滅遊ばされた土地なのである。このゆかりの土地に徳川時代建築の粹をこらして建立された知恩院こそ、淨土念佛の信者たると否とを問わず、京都に足を運ぶ者必ず一度はこゝに訪れ、上人の御遺徳の廣大さに感ぜずには居れないところである。

これにつけても考えさせられるのは、上人御在世の砌りの御ことである。勅修御傳（法然上人の勅撰の傳記）によれば、法然上人御年八十歳、御往生の直前、上人に常隨給仕五十年門弟中の長老法蓮房信空が師上人に向つ

今日は、法然上人の御命日である廿五日を選んで知恩院に詣でようと家を出た。超満員の汽車は近江路を西へくと走る。遙か前方には比叡の聖峰が十月の秋空にくつきり浮んで見えて來た。この山こそは鎌倉日本佛教の母胎である。法然上人を初め、親鸞、日蓮、兩上人、道元、榮西兩禪師等皆この山を修學の地とされたのである。

八時半頃汽車は京都に著いた。市電に乗り換え、祇園石段下にて下車、圓山公園を通り抜けて日本一と言われる知恩院の三門に出る。この三門には奇特にして又悲しき物語が秘められている。

それは、この三門は徳川二代將軍秀忠公の寄進によるもので、その建築の棟梁は五味金右衛門と言う人であつた。その設計は現在のものに比べて小さいものだつた、ところが金右衛門は熱心な念佛信者であつたので、折角總本山の三門を一生の名譽にかけて引受けたからには、後世に残して恥かしくない立派なものを作りたいと思い、設計よりも大きな今のような立派なものを造り上げた。そして將軍家の命令にそむいたと言う一切の責任を負つて、金右衛門夫妻は二人の木像を作り、棺桶に入れて三門の中二階に置き自刃したのである。この棺に入つた木像は今も三門の中二階におかれてある。まことにこの三門は金右

て、

「昔から一宗一派をお創めになられたような方々には、例えば弘法大師には高野山、傳教大師には比叡山と言うように、皆立派な御遺跡がありますが、御師匠様には一ヶ寺の寺もお建てになられておりませんが、御師匠様おん亡き後、何處を御遺跡としたらよろしゅうございましょうか」と問われていることである。

上人は高倉天皇、後白河法皇、後鳥羽上皇の三帝の戒師（授戒の師匠）であり、關白九條兼實公始め、公卿、武人一般庶民と一世の歸依渴仰の的で、若し伽藍御建立の御意志さえあるなれば如何ようなものでも建立出来る御力を持ちながら、

「あの山、この寺と一ヶ所に寺を建てたならば、自分が遣してゆく念佛法門はあまねく行きわたることは出来ない。念佛の聲するところだけが——海人漁人が賤が家でも——自分の遺跡である」

と、御一生の間、借家生活、御往生の前は栗田青蓮院の門跡慈鎮和尚の御心づくしで東山大谷の禪房（今の知恩院）に迎えられ、この草庵で御往生されたのである。

先ず御影堂（本堂）に入つて上人の御影に

向つてしばし冥目合掌、七百有餘年の昔私達に代つて御苦勞下された御恩に感泣し、且御命日に一人靜かに祖前にぬかずける身の幸をしみ／＼有難く思つた。

御影堂は大殿とも呼ばれ知恩院の本堂で、本尊は法然上人御自作と傳えられる上人の御木像で、建物は東西廿四間、南北十九間の宏大なもので、三門、大小方丈その他多くの建物と共に舊國寶建造物である。

徳川家康公は三河の人で代々浄土宗であつたことは周知のことであるが、その母傳通院は慶長九年八月廿九日伏見城で亡くなり、知恩院で葬儀が営まれ、その菩提の爲寺域を擴め、堂宇を建築したが、其の後廿餘年後失火で諸堂が全焼したので、時の住持靈巖上人が將軍家に頼み、現今の如き本堂が出来上つたと言う。

この大殿の東南隅に近い廂に一本の傘がさし込んである。之が京銘菓の名にまでなつて人々に親しまれている「忘れ傘」である。之は名工左甚五郎が御堂を建て實に立派に出来上つたが、とかく物事は「満つれば缺くる」と言われるので、わざとあの様なところに雨傘をさし込んで一寸瑾をつけたのだと言い、魔除とされたとも言ひ、又火事除の禁忌とし

て、雨をよぶと言うマジックだとも言われている。未完成を表すものにはこの外にも、この大殿の棟の上に數枚の瓦を置いている。

大殿から有名な駕張りの廊下を傳つて本山寺務所に行つた。出勤時間前とて所員も殆んど出ていない。偶々本山執事靜永師にお會ひし、同師の御部屋に案内されて茶菓の御接待を受け種々御話を承つた。

三十分程で辭して寺務所で事務連絡をした。寺務所の話では、来る昭和三十六年に迎える法然上人七百五十年御遠忌の準備に著手され、種々の記念事業の計畫もされている由その二三を挙げれば、法然上人奉讃會の結成文化施設の擴充、七百五十萬靈塔の建築等である。

寺務所を辭してもと來た廊下を歩いて集會堂に出る、集會堂は一宗僧侶の大集會の道場で、誦經、講學等に使われるところである。中に入つて天井を仰げば無残にも戦時中焼夷彈による火災を除く爲に天井板が悉く取除かれたまゝになつてゐる。

こゝの東に續いて大方丈、小方丈があり、その各室は何れも金地極彩色の襖繪（障壁畫）があり、何れも足利時代より徳川初期にかけての名匠、狩野定信、尙信、信政等の名畫で

あり、夫々描かれた繪によつて、菊の間、松の間等と呼ばれ、總て國費である。

之等の建物をめぐる廊下はみな驚張りで、現代の建築學では解明出来ない技巧によつてその上を歩むとき妙音を發するのである。

次で御廟にお参りすることにした。

「圓老大師本廟道」

と刻まれた石碑の立つている大殿東側の石段を登つてゆく、ひとしきり石段の登りつめたところに淨土宗捨世地の本寺一心院があり、之と相對して本山最古(四三二年前)の建物であり、かつては本山の本堂であつた勢至堂を左にして、更に石段を登つたところに御廟がある。

御廟とは申すまでもなく、法然上人の御遺骨を奉安してあるところである。

洋の東西、時の古今を問はず、改革者は保守派の強い迫害を蒙ることは史實に明かである。法然上人もその例にもれ給わず、専修念佛を唱導し、その教が都會と言わず田舎と言わず、貴賤男女皆その門に歸依するや、南都(奈良)北嶺(比叡)の舊佛教徒は上人に迫害を加え、ことを構えて上人を四國に配流すると言ふ舉に出た。この時上人は

「この法(念佛)の弘通は人は止めんとす

とも、法さらに止まるべからず」

と言ふ確乎たる御信念を述べられている。更に上人の死後に於てさえ、此の地に奉安してあつた上人の御遺骸を、叡山の荒法師は鴨川に捨てようと襲撃して來たのである。(嘉祿の法難と言ふ)そこで門弟達は上人の墳墓を發掘して石棺を奉じて嵯峨二尊院に移し、尙危険である爲太秦に移し、三遷して西山栗生野に於て茶毘に附し、御遺骨を元の廟地を再興して寶塔に安置し奉つたのがこの御廟であると言ふ。

この法難で大谷の房舎は破却せられ、この自由教國に對する迫害は暫く續いた。その後文暦年中に源智上人によつて再興されたのが今日の知恩院の基である。

最後に、ラジオの除夜の鐘で全國民に親しまれている大梵鐘の下に立つた。之は徳川時代の代表的名鐘で靈巖上人が奈良東大寺の大鐘に範をとつて作られたもので、高さ一丈二尺八寸、徑九尺一寸四分、厚さ九寸五分、重さは一萬八千貫位だろつと言われている。この大梵鐘の下に立つて思ひ出されることは、四年前の聖書傳法の爲の加行中のことである。當時占領軍總司令官マ元帥から「東條元大將はじめ七戰犯の處刑に當り、全國の寺院

教會に於て平和祈願をなすべし」との指令が出され、私達が十五人がよりでこの大梵鐘を撞き、世界平和を祈願し、併せて七戰犯の方々の冥福を祈つたのである。

私はこの高地に立つて、木の間がくれの祖山の墓を眺めたとき、あくまで精舎建立をしりぞけられた上人の終焉の地に、このような大伽藍を建立せられ、全國の信者が踵を接して群參する有様に、今更ながら上人の御徳の廣大さに打たれると共に、世界平和と怨親平等を祈念しないではいられなかつた。

(三重布教副團長)

○發刊以來、施本、淨土の集ひ、等の講話テキストとして、手頃のものだと好評絶讃です

○淨土の教を知るのに、これほど要を得て簡なるものは、今までにありません、各信徒一本をお備へ下さい

淨土編輯部編

淨土ラクト

信徒必携

B六、十六頁
價十圓 八圓

○目次——、ほとけさま(阿彌陀佛・觀音勢至・極樂淨土)二、みおしえ(法然上人・三部經・念佛・往生)三、おつとめ(佛壇・珠數・木魚・けさ・法衣・合掌禮拜・十念・燒香・墓參)信徒のことば

●五十部以上一割引、百部以上二割引
——法然上人鑽仰會——

正月の芝居を「初春狂言」とか「初春興行」と言つてゐるのは、江戸時代から今に到る迄變りはありません。正月は一年中で一番めでたく、楽しい、何となく希望にみちてゐる時ですから、これを祝ひ、その氣分を十分味はつて貰はうとする爲に、芝居の出し物でも昔から色々な工夫がなされて來ました。

初春狂言の代表的なものは、何と言つても御存じの「曾我狂言」であります。歌舞伎の中でも人氣者は随分澤山ありますが、時代物でこの曾我兄弟とか義經に辨慶、世話物の八百屋お七にお染久松等が主な人物であります。

しかし曾我兄弟だけは何か特別な待遇を受けてゐたやうです。我が歌舞伎を熱愛するのに似て、歌舞伎は曾我兄弟が大好きであつたらしいのです。その關係は一寸した簡単なものではなくて、宗教

的な言葉を借りて言へば、一種の因縁の様なものがそこに感ぜられるのです。

それは江戸時代に毎年正月の狂言として、各座とも曾我兄弟を中心とする脚本を上演するのが、きまりになつてゐた事からも解ります。そのわけは元祿元年に、江戸の四座が揃つて曾我の



初春狂言

狂言を上演して、曾えない大當りを取つたからで、それ以後「吉例」として初春の狂言となつたものです。

そこにはこの物語のヒーローである兄弟が、父を討たれた孤兒であり、その華やかな勇ましさに酔はせられたと同時に、絶へず根底に流れてゐた不幸な一面が、昔の觀客の心にふれて同情され、熱狂

的に愛されたにちがひないのです。つまりさうした人氣が大入を續けさせ、めでたい芝居だと言ふので、「初春狂言」にきめられた譯です。現在ではその習慣はなくなりましたが、時折「對面」や「矢の根」それに曾我をもじつた芝居が上演されるのは、その名残であると言へませう。

又、所作

事の中にも正月の情景を盛込んだものが澤山

あります。曾我物が別に季節がつであらうと「初春狂言」であつたのに對して、これは實際に舞臺

の上で春の様々な風物をみせてくれています。「羽根の禿」「乗合船」「どんつく」等がそれでせう。遊女屋の店先で羽根を突いて遊んでゐる禿の無邪氣で愛くるしい姿、

春らしい長閑な前彈で淺黄幕が落とされると、隅田川を背にした萬歳・才藏の初姿、お江戸日本橋に田舎者のどんつくが、太神樂に合せて緩急自在に踊り抜く面白味、そこには觀たゞけで初春氣分が横溢し、うき／＼とした愉しさに誘はれるのです。

百萬遍の説教よりも、こゝに現はれる追羽根、恵方参り、街頭藝人の姿にふれる時に、我々は昔の風物を知り、日本の人情を感じるのです。歌舞伎の貴重な一面は、こんなところにもあるのでせう。

新春の舞臺には、どんなものが掛かるか、それは幕間に見る茶屋娘の日本髪と共に、待遠しいものの一つです。

(梅津和夫)



アンケート特集

新しき年の初めに當つて、本誌は次の三問を廣く各界名士に質問して、以下のような御答を得た。其々の適切簡潔な文中に、必ずや深い何物かを讀みとつて頂けると信ずる。

質問事項

- ①日本の精神的バックボーンは
- ②寺院の在り方に望む事は
- ③最近讀まれた書籍、見られた映畫及びその御感想

(到着順)

増上寺法主 文學博士 椎尾辨匡

①永い歴史と本當の佛教精神ですから佛教人が眞劍にこれを果すべきです。

②寺院は古い型が多いが多地域で活きた仕事をする事です。美術館でも保育でも、公民館でも。

③眼が悪いから見ませんが「生きる」映畫が興味多いと聞かされること、力作の出版が少々出るようになったことです。

東大教授 文學博士 花山信勝

①和國教主聖德太子によつて攝受された「正法」——それは日本のみならず、世界全人類に一貫普遍すべきもの。

②開山の精神を現代に生かすこと。奈良、平安、鎌倉期成立の諸宗はそれぞれの立場に於て寺院の意味をもつ。建立當初の意義を現代に發見することによつて、道は自らに開けると思う。

③井川定慶集「法然上人傳全集」昭和日蓮聖人遺文第一卷日本佛教史を構成する立派な研究資料が、續々と公刊されることは慶賀に耐えないところである。映畫では「大佛開眼」を見たいと思つてゐる。

國會圖書館長 金森徳次郎

①日本の世界と調和する民族愛の熱情

②俗人と共に俗事の中に宗教すること。

③尾崎士郎著、人生劇場青春篇(有益では無いが面白いから)

年末年始の

エチケツト

早見君子

たとへ其のありかたがどうであつても、高價であるといふ事を別にしたら、いまの日本は戦前と變りがないほど物質が有る、むしろありあまる様になりました、そうしたなかに舊に復さないものに女の服裝(美容)と禮儀作法(つまり日本的エチケツト)があります。

私は今この二つの事を年末年始の主婦の在り方と結びつけてお話してみようと思ひます

暮ること

自分がまだ妻となつて一、二年の頃、つまり主婦見習とでもいふ時代の年末でした、いつもおしやれな私がふだん着にコートを買つて、お歳暮の相談に生家へゆきました時にしみじみと私を見てゐた父が『女のたしなみは忙がしい時に亂れるものだ、それは女として妻として何より見苦しい、今日のお前さんはきれいでないね。』と云はれた恥かしさを今

東大教授
文學博士 川田熊太郎

①日本人のまことにによりて受容せられ、西洋の學問によりて補はれ強められた佛教。

②新しき時代に適應して輝く戒定慧の燈明臺。

③エチアヌ・ジルソン著キリスト教と哲學。キリスト教哲學は、明治以來の努力にもかかわらず、日本人によりてさほどに良くは理解せられていない。これは日本人が以て攻くべき他山の石を缺くことであらう。

吉田絃二郎

①佛教的無常觀。

②より一層釋尊に歸ること。

③シートソンの「動物記」。映畫は見ません。

高柳光壽

①本來たゞ一つの筈であります、成長するに従つていろいろな要素で構成されて來ます。最初は古代神道（これは神社神道でも宗派神道でもありません）ついで佛教、ついで儒教、ついで泰西の科學が加わつてをります。

②初めは政治も學問も藝術も宗教と一緒になりました。しかしそれらが宗教から離れて行つたのが歴史的事實です。これからますます、雜物を排除して純粹になつて行くでせう。しかし寺院は存続せねばなりません。そのためには經濟的基礎を何におくかといふことが問題です。それは根本は寄附金を集めるより他ありませんが、集めた資本で事業をし、その利益で宗教的活動をしなければなりません。それには寺院が協同することです。もつと強力な組織體を作ることです。

③偶然にも毎日新聞の「青色革命」といふ小説を読みましたら、大へん面白いので、その後をみつゞけています。出て來る人物が身邊にいるやうに思はれます。

高橋良和

①佛教の沒我融合の思想。

②布教中心教化第一。

③書籍「生きている日本史」。たいくつしのぎに面白く讀むことが出來た。映畫「双児のロッセ」、ますますみられる。

も忘れません、歸りがけに今度は母に、『目上の方へのお歳暮の御あいさつには自分で伺ひなさい、女中ではいけませんよ』と云はれました。

歳暮の贈答は單に品物のやり取りではない一年に二度、つまりお盆と年末とに日常の事柄の御禮のあいさつに伺うので云はゞ感謝の進物なのだから自分がゆくのがあたりまへです。つまりあいさつが第一義で進物は手みやげ的な存在なのです、もし自分がゆかれなかつたり遠方だつたりした場合にはていねいな手紙を添へて伺へないお詫びを申すべきであります。デパートから送りつけたり商店からとゞけさせたりする缺禮を、あたりまへのやうにしてゐて平氣なお主婦さんはないでせうか。

服裝 化粧

服裝もまた然りです、黒紋附の羽織までも及びませんが、和服なら縫い紋の羽織ぐらゐは着て、髪も化粧も身ぎれいに、爪に垢があつたり、髪が亂れてゐたり、ねづみ色の足袋だつたり履物がよごれてゐたりしませんやうに、多忙な年末でも落ちついた生活のゆとりを見せて主婦のたしなみをはつきりさせて頂きたい。

NHK 社會部 高瀬廣居

①アジア諸友邦との提携、殊に中共・印度を中心とせる新しき平和勢力、そこに流れるアジア共同體の精神。

②寺院の在り方は救國の在り方と考へる。今日の教團は宗派的エゴイズムの外何物でもない。社會的政治的又地域の顧慮を離れ儀式的要素をすて、佛教そのものを民衆に向つてなげかけるべきであらう。

③宮城音彌著「人間の心」(角川書店)：下意識層に潜む人間の盲點を社會心理の俎上より分析してあます處なし。フアシズム出現の恐れある今日その様な深層心理の把握こそ大切と多大に感銘。「肉體の惡魔」……これ程正常な愛慾はいままでなかつたと思う。

文學博士 長井眞琴

①赤心あかきこころにあり。

②社會の實生活に喰い入ること。

中村辨康

②多數の檀徒をもつ高級寺院はいざ知らず一般寺院としては段々食へなくなるのは必至

です。地方的に若干の差はありますけれども段々影が薄くなつて行くのは事實で、私の地方の如きは全部と云つてよい程、市役所や學校や會社などにつとめて居り、高級寺院でも子弟の教育費をうみ出す爲に勤めに出なければならぬ状態です。要するに今迄の寺院が葬式法事に依存して生活して居るからであり、且つ宗派の數や寺院の數が多いからでもあります。自存の出来ない寺院はよろしく他寺と合併するか廢寺すべきでありましょう。元來寺院生活者は皆な悉くが信仰に専心して生活的には良寛さんのやうな氣持で居なければなりません、それも不可能とすれば、事情が許せば幼稚園とか保育園とかやるのがよいと思ひます。他へ勤務するとか、又は護持會を作つて毎月出金して貰うとか云うような姑息手段では駄目でしょう。環境にもよりますが社會的に役立たぬ寺院には「在り方」など考へられません。

女優 村田嘉久子

①他人を先にし私を後にする「ひとのため」という心持でありたいと思います。

②お寺らしいお寺。

これがあべこべに取り亂した姿だつたら、少々ウルサ型のおばさまなら『あんな風では家庭生活が思はれるわね』などと云はれませう。

年始のこと

元旦の朝のお膳に、さつぱりと化粧して用は多くともエプロシをはづして羽織ぐらいは着がへして、兩親があれば勿論のこと、夫に手について年頭のあいさつを正しくし、子供のあいさつも女中のあいさつも正しく受ける日本の禮儀は美しいと思ふ。

家は小さくともお重詰のおせちはまづしくとも屠蘇の美酒はともしくとも、このあいさつから起る雰圍氣だけでほの／＼とした初春を感じ、夫は働く力を増し子供は生涯この母を見習う事です。

日本の禮儀の美しさはまづ家庭の主婦の日常生活から不變的なもの／＼の情感の豊かさを教へ頂きたい、新らしい思想も、うすれゆく愛國の精神も、信仰も、こんなありきたりのさ／＼やかな事柄から更に新味を添へて深まつてゆくものではないでせうか。

小學校に修身がなく、祝典式がなくとも主婦の心づけひとつで確固とした信念を持つ新日本が創られてゆくと思ひます。

③眼が悪いのと病後まだほんとうに恢復していませんので、ニュース以外に映畫は見えておりません。

佛畫家 野生司香雪

①道義心の向上にあり、その道義の根底は宗教による、宗教は教義の哲學でなく實踐にあり。

②近頃往々、寺院經營困難の聲あり、それは住職が佛心から遊離して居ることを物語るもの耻づべきことである。住職が寺院外に職を有つなどあり得ないことである。

③最近に讀書界と言はず押しなべてアメリカのエネルギー万能主義に幻惑の感あり、今少し靜慮して溫故知新にありたし。

東大教授 久松潜一

①「明く淨く直き誠の心」であると存じます。

明らかな睿智と純粹な感情と卒直な意志との淨融した「まこと」であり、眞實性であり誠實であります。それは日本的であつて普遍的世界的であると存じます。

②宗教の本質的なものに徹して、その上で現實に生きゆく道を大衆に示し導いてゆかれ

たいと存じます。

③現代人といふ映畫を近く見ました。現代の世相を見られるとともに惡と罪とを犯してしまつた人間の中にもあるまこと、誠實を見ることが出來ました。惡を自覺することの中にある誠に心ひかれました。

毎日新聞社 山崎安雄

①日本とかぎりず、すべての人が隣人を愛す精神にならないかぎり、この世にユートピアの出現はのぞめません。

③村松梢風著「狩野芳涯」(ポプラ社)は子供のための本ですが、胸打たれるものがありました。最後までやり通す精神の尊さに頭が下がります。

文學博士 山本空外

①佛教。

②教化の進歩的組織的實踐。

③書籍も映畫も色々ありますが、何れも一利一害で、結局經典のほかは何にもなりません。經典ならばどれでも縁にまかせて味讀いたしたいものです。

女の年始

女の年始は三月三日の雛祭りまで、といふのは古い風習に甘へ過ぎていまは通りません。主婦が年始にゆかなければならない家はさうたくさんはありませんでせう、お三ヶ日を過ぎた頃から一寸のすきを見て伺ふ方が、先方の受ける方でも正月の用意と心組のあるうちが手がるにすむでせう。

服 装

服裝は身分と境遇によりますからどうとは申兼ますが、あへて裾模様訪問着ならずとも、黒か淡色無地の紋附羽織程度は必要です。洋裝ならアフタヌーン・ドレスとかスーツに白絹のブラウス程度でありたいものです、いくら色が似合つても上手に編んであつても手糸ものなどは禮を缺きます。

髪もお化粧も淡粧で正しくして頂きたい。時間も自分の身勝手ではなく食事時をさけて、先方の主婦の迷惑にならない思ひやりを充分に持つて早くきりあげ、話題をさがすやうになるまでネバラないやうに心がけたいもの。友人間のパーティーとか遊びごとを主にした新年會となるとぜん／＼別で、流行をもち込んだニュー・ルックでうづまつても自慢氣さへなければ相手をキツ付ける心配もなく、

東京文理 山岸 徳平
大教授

①「日本の自覚」を明確に持つこと。「日本的」

なものは敗戦後の今日こそ一層深く認識すべきである。戦時のやうに外からおしつけられず、内から各自が持つこと。

②積極的に社会事業なり教化事業なりに活躍すること。

③最近のは専門の本であるから、一般に餘りお進めするやうなものではないので省くが學術的價値の高い本が出版しづらい由は、寒心にたへない。文化國家も前途遼遠か。

正大英文學 松浦 一
主任・教授

①身・土は、元、一體。日本の人國が日本の國土の自然の如く、清美を以て生動すること
②寺院を生かすはその本尊なり、本尊を生かすはその住職なり。佛光豊かにそこに照せば、招かずとも人は來り、化導の業は自らに成り、寺院の存在もそこに光る。

元東京都 松井 春生
長官

①中道を行く實踐的傳統。

②青少年に對する宗教的涵養。

藤井 實應

①歸依之實による和の精神。

②幼兒教育、毎月連續の教化活動。

③林靈法著「若き世代への闘い」篠原正咲著「君らこそ日本を」何れも若き世代の人々に訴えた書であるが思想の固化せんとする時に清新な時代の先覺を與えてくれた。龜井勝一郎著「聖徳太子」も教えられ考えさせられた書。

美術評論家 北川 桃雄

①いろ／＼考へられるが、結局、自由を失われぬ精神と思ひます。

②從來の封建的な檀家による寺院を解消してA純粹の僧の教團の場、B在家佛教の細胞的組織の場とする事。

③横川毅一郎「日本の名匠」は日本美術史上の名匠の姿を浮彫りにして興味ふかし。

北大助教授 新聞 進一

①傳統の保持と新文化の創造の努力。そのた

自由で愉しい親しみ深い終始でありたいものです。

年賀の客受

年賀客に對する主婦の在り方はまた、とてもいろ／＼で、こればかりは家庭と身柄と夫妻の性格に依る外はありません。

主婦の服裝は、案内の時間が無い場合でも羽織を替へれば禮を缺かないほどの身だしなみが必要です、客を待たして置いて身じまいをしたり客の多い申わけをしたりするのは非常に見苦しく客を困らせます。みだりに食物のわる獎めをしたり急いでゐるのに引きとめたりつまり通念的なおあいさつはぬきにして一通りの社交的常識をもつ事務的に進まず方が兩方共に好都合であります。

以上述べた事はあまりに簡単に過ぎますが、人を驚ろかすほどの變化もないところに初春らしい感じがあると思ひます。

私の申すことは或いは古いかもしれない、然し新らしい日本に活用する美容とエチケットは昔風の古さをとり容れた新らしい在りかたでなければ生きてゐない、私の云はんとし、希まんとしてゐるのは、古くも新らしくもない即ち一九四三年のものでありたいと思ふのであります。

めには明治維新以來の先人の近代化の努力を顧みその成敗の跡を知ること。

③何よりもまず信徒を寺に來させるようにつとめること。その生活にむすびついてゆくこと。

③イ、田宮虎彦「繪本」 ロ、黒澤明「生きる」共に今日の社會と個人の問題に眞正面にとりくんでいる。たくましい作家的良心に感動。

東京高等
保育學校長 内山憲尙

①すべてを金によつて解決し、物によつて評價せんとするアメリカニズムの洗禮を受けている今日の日本人を以て解決し、靈によつて理解させるようにしなければならぬ、これが日本の精神であり佛教の眞髓であるからである。

②一寺一事業。

③「日本無罰論」パール著「ニッポン日記」と共に全日本人に一讀して貰いたい本である。

「大佛開眼」あんまり大した感激は受けなかつた。昭和十年項築地小劇場で細川ちか子主演の方が印象に残っている。

「セールスマンの死」アーサー・ミラーの作品、華やかなアメリカの文化生活の裏に秘められた物語・物質文明の弱みを明示しているリアルな映畫、アメリカ映畫としては傑作。

東京外大
成蹊大教授 島田進吾

①日本精神のバックは愛の共同體原理に基き完全に民主主義であらねばなりません。そして自我の意識より立つ道義特に「孝」を力説します。

②寺院は從來その宗教的活動が消極的に思われ現世に於いて強い生を宗教と結合せしめることでせう、それには全國の寺院が生の現代的課題をもつと捉えてキリスト布教の如く絶えず集會と普及をし心に佛教があることでせう。

③また、最近よんだものでは亂讀の中でもマローの「人間の條件」ゲョーテの「ファウスト」笠信太郎共著「資本主義の運命」即ち人間の生の在り方、また經濟的には米國の展望と云う意味でよみました。映畫では宗教に對する愛情の人間性の展開として「女狐」でした。また愛の美しさと家庭を

温かく表わした「君去りし後」です。

宗教問題
研究所長 濱田本悠

①日本の、凡てを容れてあまさぬ大乘の精神だと思ひますが實踐的には、左右對立を止揚せしめる事だと思ひます。

②寺院は、その寺族生活程度をグンと下げない限り結局ゆきづまつて、布教も何にも出來なくなると思ひます。

③豆本二つ御紹介、山田得立、「實在と人生の書」、長部長章、「佛教藝術かん賞の手引」、知切光歳「小話親鸞」宗教映畫館が一つ東京にあつたらばと思ひます。

浄土 二月號

一月廿五日發行

こゝろの温まる話
お釋迦様と鼻くそ

吉田絃二郎
藤田寛海

ねはんえの心
新興宗教を切る

藤原了然
齋藤昭俊

體内の灯
創作吉水

一瀬直行
東山未知夫

訪問 かく思ひ、かく望む

龜井勝一郎

忍戀上人

大橋智譽史

其他・鬼はどこに・高橋、古寺訪問・時評

佛 教 音 樂 を 語 る

名 士 訪 問

清 水 修

本月は現代佛教音樂の一人者である清水氏を訪れる。氏は純作曲家として、此間も文部大臣賞を受けられたのであるが、日本音樂界のホープである。しかも桑内の出身であつて新しい佛教音樂の發展に熱情を傾けられてゐる。

佛教音樂とは

「一口に佛教音樂と申しますが、何か他の音樂と異つたものがあるはずですが、どういふものを佛教音樂と言えるでしょうか」

「私は一寸抽象的だとは思いますが、佛教の信仰を持つ人によつて作られ歌われ聞かれるものが佛教音樂と申せましょう。曲がよいからと言つて、讚美歌のメロディーに、佛教的歌詞を付けても、決して佛教音樂ではないと考えます。

此間も私が日比谷公會堂で、私の作曲した佛教音樂の發表をやつた時、私の友人の音樂批評家が私に喰つてかゝるのです。其は「なぜあんなものを作る。純粹な音樂家が佛教に頼まれたからと言つて、佛教音樂を作ると言

つたような、たのまれ仕事の作曲をするのか」と言うのです。此は純粹な立場から、私が佛教者でないと思つて抗議したわけですが、勿論私が佛教者であると知つて、よく了解してくれたのですが、

この話のように、佛教音樂を作るからと言つて、やたらに佛教的信仰のない人に作詩作曲を依頼してもどん／＼純粹な佛教音樂が生れるわけがありませんよ。だから、私は、佛教者の信仰そのものから生れてこなければ、人の信仰を呼びおこし、ゆり動かす強い力が持てないと思うのです」

「佛教音樂獨特の旋律とか、音樂形式とかを考えないでいくわけですね」

「そうです。よく寺院法要で使われる雅樂にしても、佛教と共に傳つただけで佛教音樂とは言へますまいし、日本の音階がそうだと考えるのも妙です。そう言う佛教獨自のものというせまい見分からすると、しやうみやう聲明等が比較的佛教本來のものと言える程度ではないでしようか。しかし之では佛教音樂は成り立ちますまい。廣く音樂全體を基にして立たなくては

本當のものではないのです。

キリスト教の音楽でもそうです。はじめは俗曲、民謡の類でも、キリスト教のものとなる。つまりキリスト教者によつてものにされた時に、キリスト教音楽が成立つて行くわけで、狭く考へずに、信仰という本質的なものが宗教音楽を成立たせるものです。だから、私は佛教音楽はその信仰から出たものでなければならぬと思います。」

最近の佛教音楽

「最近の佛教音楽の動きはどうですか」

「かれこれ廿年前になりますか、伊藤さん等が主唱して佛教音楽協會を文部省内に本部を置いてやつたのが創めのようです。伊藤さんは朝鮮で中學校の教師をしておられたクリスチャンだつたのですが、驟然として悟る所があり、佛教でなければ救はれないと佛教に入られた篤信の方です。此方が、以前キリスト教に居られました關係から、どうしても佛教は音楽を持たねばならぬと痛感され、全國をわらじがけで歩いてその趣旨を説いて廻

り、とうとうこの熱意が、佛教界、作曲家達を動かし、文部省の援助を得て、佛教音楽協會が成立したのです。

弘田龍太郎、本居長世、藤井清水、藤井清心、野村成忍、山田耕筰等の協力で、どんな仕事を始め、年に一冊づつ、二十篇位を収めたものを出しつづけたのです。今でも佛教音楽となると、之が使われています」

「山田さんなんか、佛教音楽をどう考えておられましたか」

「あの方は、仲々頭のよい方ですが、國民音楽と言うものは宗教音楽を基礎としなくてはだめだという考です。従つてキリスト教でも、佛教でもよいが、日本では佛教を取らねばならぬと言われ、この協會の發足當時は大した骨折りをなさつていました。丁度、私等の學生時代で、よく御手傳いに行きました。」

「その出た曲の中で、印象的なのは何か」

「ざつと二百曲位で、これで佛教音楽を評價するのは難しいですが、四弘誓願、心の合掌、恩德讃、讚佛歌等、客觀的にみて印象的

なのが相當ありますね」

「山田さんの梵音交流ぼんおんこうりゅうは如何です」

「あれは名曲ですよ、元來バリーで佛國寺という佛教寺院が建つというので、ヨネ、野口が作詞したものに作曲したカンターターですが、立流なものです。同じく私の作つたカンターター「蓮如」もかなり感銘を與へるものと思ひます。このような大形式の音楽では山田・弘田兩氏が二つ三つづつ、本居さんが「釋迦」、私は其他、「樹下燦然」等です。之からも、どん／＼書いて行くつもりです。

大體、佛教音楽は、この大形式の音楽と、信者と共に歌う讚佛歌のような小形式との二つに分けられるでしょう。前者は例へばバッハ、ベートーベンの大曲で、之を皆は聞く方に廻るわけです。しかし、目下の寺院では、場所的にも一寸かたんに手に負えません。私は作つております。」

「戦後その協會はどうなりましたか」

「中絶したまゝなので、私共がいろ／＼寄合つて日本宗教音楽協會を作りました。權藤圓立さんーといひますと、古い佛教音楽の研

究家で聲明や梵唄の大家ですが——とか、谷大から上野を出た岩崎成章とか、詩の長田恒雄、本多鐵磨、賀來琢磨、さん等とかを合せて出来ました。何分にも宗團の援助も少いし思うにまかせませんが、目下盛に組織の擴大に努力していますよ。關西宗教音樂協會等、京大阪方面、福岡、北海道と各地にその機運が瀰つていきますね。」

法要と佛教

「所で近頃は音樂法要が盛になり、佛教の儀式に取り入れられています、此方面での發達は今後どうでしょうか」

「今の所、今までの法要に對しては、いさゝかその合わない所がありましたね。無理に、くつつければつくものの、法要とは大體切りはなして、別のプログラムで音樂法要をやつていくようです。本當に音樂法要をやるには、法要そのものから根本的に作り直す必要があると思いますね。」

第一、樂器の點でも、法要なり本堂にしつくりするものがなくて困りますよ。オルガン

となると、どうしてもキリスト教の匂いがするし、ピアノは俗的ですし、結局聲樂そのものがよいわけですが、まあ仕方なくオルガンを使っている状態です。

だから、今の所は過程の段階で、本當の音樂法要なるものを完成するには長い努力と工夫が必要ですね」

「多くの僧侶方が誦經されているのを聞くと、自然に一つの高さでなく、三度とか五度とかの音程を取つて誦經するために、自から和音がでてくる。中には不完全和音にもなりますが、反つて莊嚴さを増す場合もあります」

「それは青年老年の自然の音の高程ですから、一定の高さにせねばならぬという事はなく、自然とまゝでいいでしょうね。キリスト教の方でも、グレゴリヤン、ジュアンド等はもと／＼一つの音程で歌っていたのが自然に二重の音程になり、だん／＼發達して和音になつたのですよ。」

心底を動かす佛教音樂

「まあ、今日は色々お話ししましたけれども、佛教音樂家としての私の感激した話を一つ付け加へましょう。一年前、蓮如上人の遠

忌の時でした。京都の松竹座でカンターター「平和」を上演した時の事です。各地から集つた信者、特に老人等が多かつたでしょうが、其の人々も、この音樂會の切符を買つて、はじめて聴く洋樂を國の土産にもと思つてか、相當入つておりました。オーケストラ六十人コーラス百人程でした。どの程度この人たちにわかるか、私は不安な氣でおりました。終りに近づいて歌詩が「なむあみだー」と言うくらいかえしに入つてくると、どうでしょう。会場内が何やらざわ／＼と言つてゐるのです。よく聞くと口々に「なむあみだ／＼」と稱えており、三分の一位の人が涙をこぼしながら、聴き稱えているのです。有難涙ですね。

私も全く感激しました。大體音樂で泣くという事を聞いた事がない。又、此等の人々はおそらく音樂を聞くのは初めての人が多いのです。それにこのような状態です。しみじみと佛教音樂に打ちこんで來た私は、この仕事の尊さと、使命の重大さに感ずると共に、この位嬉しかつた事はありませんでした。中外の涙骨さんも涙をぼろ／＼こぼしながら「よかつた／＼」と言つてくれました。

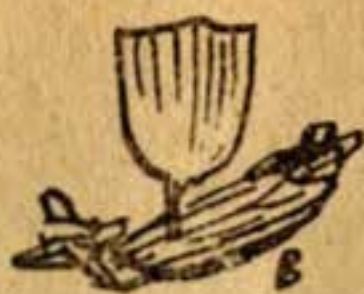
音樂でなければならぬ何かがある、私は其時の事を思つて、いつもこう思うのです。」

創

作

吉

水
(六)



東山未知夫

遺誠

人々の口から口へと傳わる噂は虚偽の場合もある。しかし亦、案外真相が傳へられることも多い。

今朝になつて農民達に傳わつて來た噂は、昨夜の真相そのものだつた。

「時國さまを討つたのは定明の一族とよ。」

「定明は眉間に矢疵をうけたとか。」

「その疵あとが一生かくせないから、顔を見れば、それが定明だとすぐ判るだろうよ。」

「そ、それを定明が一ばん苦にしてるようだ。」

「なぜ。」

「時國様の仇がさ、ちやんと私がその仇でござる、という風に目印を自から附けているようなものだから。」

「時國様の親類の人たちが、もう定明を追つて行つたそうだ。」

「まさか？」

「いや、わしが聞いたところでは、定明はもう此の庄を逃げ出して、あとを絶つたそうだよ。」

「さもあるう。して、定明の眉間へ矢を射込んだのは、何んと、勢至丸さまぢやそうな。」

「そうだつてのう。さすがは時國様の御子だ！」

「たいしたものだ！ 弓矢を持つて生れて來なかつたみたいだなあ。」

「本當だ。勢至丸さまは小矢兒だ。」

「そうだ、みんな、これから勢至丸さまを小矢兒と呼ぼうよ！」

「うん。」

「うん。」

稲岡の庄の農民たちは、勢至丸の武藝に驚くとともに、早くも「小矢見」という呼名を作つて了つた。

さて、時國公の蒙つた疵は致命的だつた。夥しい出血の量は、刻一刻と時國公の生命を奪い去りつゝあつた。奥方と勢至丸との必死の介抱によつて、その夜は命を保つことができたけれども、しかし死の到來は最早や時間の問題となつていた。

時國公は既に死を覺悟している。今まで勞苦を分け合い、互にいたわり、互に勵まし合つて來た奥方と別れて行くのは、人間の情として忍びがたいものがある。まして、九才になつたばかりの勢至丸を、か弱い母の細腕に残して、自分ひとりが先立つて行くのは、不びんに耐えない。「父なき兒」として、勢至丸の將來は暗いものになりはしないだろうか。時國公の眼前には、今後の母子の姿が幻のようにならつていつている。淋しい山の中を、勢至丸母子がさまよつてゐるのである。求める助けもなく、母と子とはやつれ果てて、空しく歩きまわつてゐる。やがて母子は山の端にある絶壁に出た。母子は足もとに絶壁のあることを知らないのだろうか。母子は、あらぬ方向に虚しく幻影を求めて、心をそらにして物に憑かれたようにその幻影を追つてゐる。母子は氣狂いのように何を追い求めているのだろうか。その幻影に氣をとられて、母子は、自己の足を踏みはずそうとしてゐる。すぐ前には深い／＼底のない深淵が待ちかまえてゐる。

のだ。あつ！いけない！幻影が母子を深淵へと誘つて行く。危いっ！勢至丸がその幻影を捕えようと、つつつと斷崖に向つて走り出した。

「まてつ！まて」

時國公は渾身の力を出して叫んだ。

「何か、おつしやいましたか」

奥方は、心配したまなざしで時國公の顔をのぞき込んだ。

「うつ、う、う……。いや、なに、何でもない」

時國公は、夢幻の境から、現實の境へと再び心を取り戻した。

「勢至丸や。」

「あい、父上様」

「奥や。」

「はい。……しつかりなされませ。勢至丸のことは御心配なされませぬがよい。きつと、きつと立派に成人させます。そして殿様の御無念をお晴らし……。」

「いや。いや。……やつぱり。」

やつぱり時國公の危惧した深淵の幻影は事實だつた。「仇」という幻影を追つて、母子は深淵の無底の深みに足を踏みすべらそうとしてゐる。いけない。母子を深淵から救わねばならない。まだ命のあるかぎり、このことだけは言い残して置かねばならない。「仇」を追うことは、母子を無限の深淵へ落すことになるのだ。仇が仇を生む。



そして又新たな仇が更に亦仇を生んで行く。仇——仇——仇……。仇の糸の連続が、人々を果てしもない深淵へと引きずり込むのだ。

時國公は苦しい呼吸の下から、懸命の努力の色を見せて、血を吐くような言葉をにじみ出させる。いや、口邊には、實際に血がこみ上げているのだ。このことだけは言いたい。

「兩人とも、ようくお聞き。」

「はい。……はい。」

「定明を恨んではならない。」

「どうしてでござりまする。」

「長い——糸がつずいているのだ。」

「定明が、この私を討たねばならぬような糸が……。」

「そなたが、又、定明を討てば、その糸がまたつずいて行く。」

「定明の子が、そなたを討たねばならないような糸が。」

「親から子へ、子から孫へ、私と定明の子孫は、互に仇を討ちあつて行かねばならぬ。」

「この仇、仇、仇……の糸は、果てしなくつづくのだ。」

「互に、仇を討つために生れて、そして又その仇に討たれて死んで行くのだ。」

「互いに、深い／＼底のない淵へと踏み込んで行かねばならない」

「このような、恐ろしい糸は、此の私かぎりでは絶ち切つて了いた

い。」

「私の私怨を消して了うのだ。」

「そうすれば、この糸は切れるのだ。」

「無限の深淵への迷いの糸、無明の糸を切れ、とみ佛の教えが説いている。」

「そなたは、この無明の糸を切るために、み佛の道へと入つてはくれまいか。」

「そなたが、み佛の道へはいることによつて、そなたは勿論、わ

たしも、定明も救われるのだ。」

「み佛の道は、われわれを生かす道なのだ。」

いや。われわればかりではない。すべての人を生かす道じや。

そなたは、み佛の道へ入つて、われわれを救つてもらいたい。

「そして、此の世のありとあるすべての人に、彼等が生かされて行くみ佛の道を、弘めてもらいたいのだ。」

「はい。きつと、きつと、父上のお志を……………」

「ありがたい。聞きいれて下さるか。人間が、みんな救われ、みんなが生かされて行く道、み佛の道を求めて下さるか。」

「はい。……………」

「おゝ、これで安心した。もう言い残すことはない。……………私のからだを西に向けておくれ。」

時國公は、西に向つて端坐した。もう心に残る何物もない。すべてを拂い落したようなさわやかな氣持になつて、靜かに合掌して佛を念じた。

人生の歸趨は、太陽の沈む西方へと、期せずして指向する。時國公の一生は、一日の日照の没するところ、すべてのものの終歸するところ、西方へと昇華して行つたのである。

勢至丸にとつては、父の最後の教誡が、瞬時も忘れることの出来ない心の聲となつて、勢至丸の心肝に浸みこんだことであらう。

謹 賀 新 年

東京 芝 増上寺

東京 小石川 傳通院

同 善光寺

同 嚴淨院

東京 深川 重願寺

静岡 駿東郡 仙年寺

鎌倉 大佛 高德院

青 森 市 楠美知行

内山 憲尙

高橋 良和

大 正 大 學

同 附屬 夜間 高等學校

法 然 上 人 鑽 仰 會

同 編 輯 部 一 同

芝園だより

○明けましておめでとう存じます。獨立日本新生の新年を壽ぎ、本年も更に本誌のために倍舊の御協力をお願い申します。

○新年號の出来榮えは、その装いからして一新の面目を強調致しましたが忌憚のない御批判をお願い致します。内容の點では、恒例のアンケートに知名の方々、本誌に因縁深い方々の御寄稿を得、皆々様と共に新生の指針に致したく存じます。

○中村孝也先生、永らく御病氣のところ、その病中の貴重な御體驗を述べられ、先生の指向される人生の歸趨が伺われるようです。厚く御禮申し上げます。

○アメリカより歸られた中村元博士、自主佛教のため萬丈の氣を吐かれ、その餘滴を本誌にお洩し下さつてありがとう存じます。

○一事をも一人にてなし得ざる人の世に、本誌の順調なる成育は、正に和合衆の好見本。本年も何卒どうぞよろしく。(竹中)

○ほんの瞬間のことではあるが、

新しい年となつた。なんでもこうした一瞬間の變化の中に貴重な意義と價值があるとするのが人生のようです。淨土もこの一瞬をエポックとして、どん／＼新しい企畫を考へたいと張り切つています。

○歩いていても、車の中でもどんなものをどんな風にと考へていまいすが、ない智慧と、ない袖はふれぬ様です。この點讀者各位から大いに後援を頂きたいものです。

○中村先生は最近スタンフォード大學の講義を終へられて歸られたばかりの忙しい所を御邪魔いたしました。末だ荷物も全部着いていないのでその内に折を見て纏まつたものを頂けると思つています。

○放送局の高瀬廣居氏からは、陰に陽に大きな力を得て居ります。有名な人を放送の合間に訪問していただきますのも、氏の厚意にて、今後とも宜しく援助下さる筈です。

○新進の酒井尊昭氏からは、時評を頂いています。「世界佛教」等にも執筆されて居ます。(安居)

○本號を手になされ、淨土も一つ大きくなつたと感じられれば幸、新年の清新な氣分で、どし／＼と押して行くつもりです。

○其とともに是非會員各位で、一人一名づつをモットーに新會員を得て、法をなるべく多くの人とともに喜びたいと思ひます。見本はおハガキで申込まれれば、すぐお送りします。

○安居と二人、會つて口を開けば「淨土々々」と、憑かれたるものの如し、ことさように張切つてゐます。本年もよろしく。(龍海)

誌代 會費半ヶ年二百圓、一年四百圓(十共)。毎號定價三十圓(十圓、前金切次第清算通知申上げます。確實便利な振替を利用して下さい。

「淨土」 正月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和廿七年十二月廿五日印刷
昭和廿八年一月一日發行

(定價三十圓)

編輯兼 眞野 正 順

印刷人 春山 治部左衛門

印刷所 共立社印刷所

發行所 法然上人鑽仰會

東京都千代田區神田保町三ノ
東京都港區芝公園五ノ一〇
電話 東京八二一八七番
芝(四三)一三二八

佛教協會編

新譯 佛教聖典

普及版・A6一二〇頁 價 三五圓
新大衆版 ポケット型一二〇頁
上質紙レザー装・價 六〇圓

正月施本に講習會の講本に好適

京都中央局區内正面烏丸東
振替 京都二七四三

法藏館

東京教育大學教授
石井庄司著

要解 枕草子

要解 徒然草

要解 萬葉古今新古今

要解 俳句俳文俳論

送料	定價	送料	定價	送料	定價	送料	定價
一〇〇	一五〇	一〇〇	一五〇	一〇〇	一五〇	一〇〇	一五〇

文學博士 竹田 復著 漢文要語の基礎知識

東京教育大學教授 山岸德平著 國語の綜合知識

同 内野熊一郎著 漢文入門

東京都目黒區芳窪町三番地
振替 東京一九〇四八七

敬文社

印刷部 印刷一般・圖書出版
纖維部 販賣・縫製加工

株式會社 正興社

社長 松田 馨

東京都千代田區丸の内丸ビル七四八
電話 和田倉(20)三五二六番

教學界希望の研究誌

「淨土學」 第廿四集發刊

定價百五十圓
送料三十圓

大本阿彌陀佛經の發達
三代之釋
淨土宗義の二祖眞筆授手印解題
師圖解題
宗學展開の課題
名越派獨立運動のこと
御祈願所増上寺について
近世淨土宗と華嚴學人
〔申込所〕 東京都豐島區西巢鴨四丁目大正大學内

大野隆 眞道
林隆 眞道
鈴木隆 眞道
惠中山 眞道
金谷正 眞道
竹川信 眞道
宗上宗 眞道
村垣眞 眞道
稻村眞 眞道

信仰誌「淨土」とその信仰を裏づける研究雜誌「淨土學」を坐
右に是非一本お備へ下さい。尙第二十二、三集殘部若干あり。
即刻申込み下さい。(定價送料廿四圓に同じ)